

僕の図書室ノスタルジー



地域マネジメント研究科助教授 辻川 尚起

マルセル・プルーストの『失われた時を求めて』では「一杯の紅茶」の「かおり」がきっかけとなり「私」の長い長い回想がはじまる。村上春樹『ノルウェイの森』では飛行機内に流れるBGM「ビートルズの『ノルウェイの森』」が「僕」に学生時代の記憶をよみがえらせる。五感もたらす記憶との再会。同様に、図書館に入ると感じる匂いによって思い出される懐かしいエピソードが僕にもある。話は僕がまだ中学生だった頃にさかのぼる。

自分の感性に触れ、それを磨くための場としての図書室という記憶。夏休みの宿題で読書感想文を書くという課題が出た。指定された課題図書以外でもかまわないということだったので、早速、図書室に向かい、どの本を読んで感想文を書こうかと考えた。そんな僕の目にとまったのは『読書感想文の書き方』という本。瞬間的にこれだと思った。この本には「読書感想文の書き方」のコツが書いているはずだ。はたしてその方法は妥当なものか、この本を読むことによって本当に良い読書感想文が書けるのか、それを自分の力で判断することができるようになるだけでも、学校側が意図している読書感想文という課題の目的を上回って、僕自身、何かしら得るものがあるはずだと感じたのである。夏休み明けに「『読書感想文の書き方』を読んで」という読書感想文を提出したところ、残念なことに担任の先生にはふざけているとられたようだった。きっと僕の普段の行いが悪かったせいなのだろう。けれど、今でも僕があつたときに図書室で考えたことは的外れではなかったのではないかなと思う。

未知の発見に出会う場としての図書室という記憶。昼休みに友人たちと図書室でたむろしていたとき、ふと目に入った本の著者の名前がひっかかった。エドガー・アラン・ポー。どこかで聞いた名前のような気がする。すぐにそれが江戸川乱歩とそっくりな名前だということに気がついた。その場にいた友人たちと話し合った結果、江戸川乱歩は小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)のように日本人ではないという結論に至った。

ちょうど授業で、ある人(アルフレッド・ウェゲナー)が世界地図を眺めていて各大陸や島の外周ラインが隣接するそれとだいたい一致することに気づき、もともと1つの大陸(パンゲア)だったのではないかと考えたという話(大陸移動説)を聞いた後だったため、それ以来の新発見を僕たちはしてしまったのではないかと、ただただみんなで大興奮。無知とは怖いものである。すぐに先生にその話をしにいったところ、表情ひとつかえなくて先生は教えてくれた。江戸川乱歩とエドガー・アラン・ポーはもちろん別人で、江戸川乱歩がエドガー・アラン・ポーという詩人・作家を尊敬していて、そのオマージュとして江戸川乱歩というペンネームにしたとのことだった。なんだと落胆すると同時に、自分たちの教養の無さをみんなで大反省した。

非日常を経験できる場としての図書室という記憶。いつも口数のひどく少ない友人が図書室で黙々と本を読んでいた。何を讀んでるの?となにげなく聞いてみたところ、振り返ったその友人が本のタイトルを僕に教えてくれた。『悪魔の飽食』。苦笑いで顔が固まったまま、後ずさりして僕はその場を去った。その本が著名な作家の作品だったと知るのは、それから10年以上あとのことだ。

話をもとに戻そう。においというのは繊細なもので、季節や天気によって思い出される記憶も異なる。中学時代の記憶が思い出される日もあれば、それ以降の記憶を思い出す場合もある。そのいずれも実に貴重な時間であり、懐かしい友人との再会のようなものだ。思い出そうと思ってもなかなか思い出せない経験がある一方で、五感による知覚がきっかけとなりよみがえる記憶がみなさんにもあると思う。もしこれからそのような場面に出会ったら多少忙しくても少し立ち止まって、旧友との再会のように記憶との対話をゆっくりと楽しもう。